

# IV 支援教育部門所員会

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 「どの子にも確かな学力保障を」  
～支援教育研究協力校 2 年目の取り組みから～
- 3 「ユニバーサルデザインの授業づくり」
- 4 「支援教育について」  
～この 4 年の流れを振り返って～
- 5 「支援教育研究協力校 1 年目の取り組みから考える体制づくり  
授業づくり」

# 1 はじめに

【平成 27 年度研究テーマ】

ユニバーサルデザインを土台とした学び合いの授業づくり

## 1 研究についての基本的な考え方

特別支援教育が法制化されて9年目を迎え、通常の学級においても、学校生活に困難がある児童生徒の個に応じた配慮・支援と、特別支援教育の考え方を取り入れた通常学級の授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）、学級づくり（個のちがいを認め合える集団づくり）の実践が広まっている。今年度も引き続き、支援教育研究協力校へNPO法人ラヴィータ研究所所長米田和子氏（平成22年度～）にご指導をいただきながら、『ユニバーサルデザインを土台とした学び合いの授業づくり』を共通研究テーマとし、その3つの要素である『視覚化』『構造化』『協働化』の具現化と、さらにそれらを教科内容の深まりへつなげることについて研究してきた。

また、障がいの有無にかかわらず、すべての子どもが安心して生活し学ぶことができる環境整備、授業規律や学級ルールなどをまとめた『スタンダードづくり』に取り組む学校や『安心と自信を持って学び合える授業研究』を実践する学校など、集団づくりと授業づくりの両面で支援教育の推進を図っている。本市では、『授業のユニバーサルデザイン化』から『学校のユニバーサルデザイン化』へ、支援教育の視点を学校生活全般にいかしていく計画的組織的な取り組みを支援し、広く発信していきたい。

さらに、本市教育センター巡回相談員により、2年間実践してきた1年生サポート巡回の取り組みを終了し、今年度からさらに1年生すべての児童を対象に、ひらがな検討会を実施した。読み書き（かな単語10問テスト）のつまずきの把握および分析を教職員が実施し、それをもとにした検討会を通常の巡回相談の際に行った。これは児童の早期の実態把握と支援方法の検討を教職員自らが実践できるようにすることを可能にするものである。今後も、実態把握と支援方法についてのさらなる研究を進めていく。

一方で、学校・園でのさまざまな取り組みや実践、センターと連携した新たな取り組みが行われているにもかかわらず、保幼・小・中・高の縦の一貫した連携の中で、教育的ニーズのある子どもの「連続性のある支援」や「多様な学びの場」がまだまだ保障しきれていないという課題もある。これまで個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成・活用、そして引継ぎもていねいに進められてきたが、あらためてそうした現状が浮き彫りになり、引継ぎシステムの再点検再構築が望まれ、そのための研究研修を進めていく必要がある。

平成28年4月1日の「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の施行」に伴い、大阪府がこれまでも進めてきた「ともに学び、ともに育つ」教育のさらなる推進が求められる状況で、子どもやその保護者との合意形成の下、子ども一人ひとりの教育的ニーズを的確に把握し適切な支援を行っていくために、アセスメント力や学習プロセスの検証力を高めていくことを、求めつづけていきたい。

## 2 研究の進め方

### (1) 研究校

支援教育研究協力校に市内小・中学校 4 校を設定する。(小学校 2 校、中学校 2 校)

### (2) 研究の方法

- ・特別教育アドバイザーによる巡回相談および授業研究・校内研修会講話。

講師：NPO法人 ラヴィータ研究所

子ども発達相談センター・リソース「和」所長

S. E. N. S の会大阪支部会事務局長

米田 和子 氏

- ・月 1 回の所員会における情報交流。
- ・第 2 回教育センターフォーラムでの実践報告。

### (3) 支援教育研究協力校の研究内容

通常の学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童生徒に対する適切な指導・支援のあり方と、それを支える校内体制整備について、年間 4 回の特別教育アドバイザーの専門的な助言・指導を得ながら、実践的研究を行い、支援教育に対しての教職員の資質向上と学校組織として学校力の向上を図る。

また、その成果を教育センターフォーラムで報告することを通して、本市教育の充実を図る。

<支援教育協力校訪問スケジュール>

A 小学校 (支援教育協力校 2 年目)	
5 / 21	校内研修 (講話)
6 / 17	授業研究会 1 年算数科
7 / 22	校内研修 (講話)
9 / 3	巡回相談

B 小学校 (支援教育協力校 2 年目)	
6 / 24	授業研究会 5 年社会科
8 / 6	校内研修 (講話)
11 / 13	授業研究会 4 年国語科
1 / 20	校内研修 (講話)

C 中学校 (支援教育研究協力校 1 年目)	
7 / 10	巡回相談
8 / 26	校内研修 (講話)
10 / 19	巡回相談
2 / 16	巡回相談

D 中学校（支援教育研究協力校 1 年目）	
7 / 8	巡回相談
8 / 26	校内研修（講話）
10 / 19	巡回相談
11 / 30	授業研究会 2 年

(4) 特別教育アドバイザーによる課題提起

4 月 21 日、支援教育研究協力校の学校長および支援教育所員と特別支援教育アドバイザーの顔合わせをし、研究推進の視点の確認、各校支援教育年間計画の交流、訪問日程の調整を行った。

<アドバイザーより 5 年目への提言>

子どもの実態に応じて行うことが大前提・・・

- ・ 中学校でのユニバーサルデザインの取り組みの広がりをもっと進めること
- ・ 合理的配慮の具体的な取り組みを考える
- ・ ユニバーサルデザインからインクルーシブ教育へつなげていく

そのためには



- ・ 基礎的環境整備「視覚化・構造化」とともに→「協働化」学び合いへ広げる

**今後の課題** 教育内容の深まり・・・授業は分かりやすいのか？

教材は手段である。授業の目的は、学び合い活動の中で内容を通してコミュニケーションを育むことにある。

**RTI モデルの考え方**

レベル 1・・・基礎的環境整備（ユニバーサルデザイン）対象はすべての子ども

レベル 2・・・合理的配慮 対象は個別のニーズに合わせて

レベル 3・・・個別的指導 対象は個別のニーズに合わせて

授業の指導案の中に個別の指導の欄を入れ、どこで支援を入れていくかを検討する

(5) 各校所員の研究テーマ

ユニバーサルデザインを土台とした学び合いの授業づくり	視覚化・構造化・協働化の具現化から教科内容の深まりへ	A 小学校 どの子にも確かな学力を ～支援教育研究協力校 2 年目の取り組みから～
		B 小学校 ユニバーサルデザインの授業づくり
		C 中学校 支援教育について～この 4 年の流れを振り返って～
		D 中学校 支援教育研究協力校 1 年目の取り組みから考える体制づくり 授業づくり

3 研究経過

月	内 容
4 月	所員委嘱式 研究課題について討議
5 月	各校の研究テーマの交流
6 月	各校の取り組みの交流 授業研究を終えて 2 校
9 月	夏期支援教育研修会についての報告・交流 昨年度の研究協力校の実践を参考に今後の取り組みの検討
10 月	教育センターフォーラム発表に向けて 各学校の取り組み・テーマの検討
12 月	教育センターフォーラムの発表テーマと大まかな発表内容の交流
1 月	教育センターフォーラム冊子原稿読み合わせ 研究紀要についての説明
2 月	教育センターフォーラム最終リハーサル

2月	教育センターフォーラム本番
2月	年度末総括 次年度の支援教育研究協力校の流れについて 研究紀要完成

## 2/12（金） 第3回教育センターフォーラムの各校の発表

### ○「どの子にも確かな学力を～支援教育研究協力校2年目の取り組みから～」

確かな学力保障のための取り組みについて、合理的配慮のPDCAサイクルについて

- ・家庭訪問や個人懇談等で「個別の指導計画」の作成。合理的配慮の明記。
- ・個別の指導計画を立てている児童に対し、算数科を中心に教室に入り込み、学習支援を行う。
- ・学習室での集中的な支援。
- ・登校支援。
- ・家庭訪問や個人懇談会で個別の指導計画の見直し。
- ・個別の指導計画やその他の資料を児童ごとにファイリングし、閲覧可能な鍵付きロッカーに保管。

### ○「ユニバーサルデザインの環境設定と授業づくりについて」

どの子にも分かりやすい授業（ユニバーサルデザイン）をめざした研究を進めるにあたって

- ・授業の基本的な形態としてUDの考え方を取り入れていく。  
（どの教科においても目に見える形での配慮を考える。教材の工夫・発問の焦点化。学び合い。）
- ・授業以前の取り組みとして、UDの基礎的環境を整える。  
（掲示物〈児童目線〉。教室の整理。児童の持ち物等。）
- ・授業のアイデアの交流。
- ・昨年度は国語科の授業を中心に研究をすすめたので今年度は他の教科も取り上げる。2年間の研究を振り返って考えたこと、実践していくこと
- ・今後もUDの考え方をベースにして、一人ひとりを大切にしていくこと。
- ・授業づくりのためには、まず学級集団作りが大切であること。
- ・安心と自信を持って学習できる学校をめざしていくこと。

### ○「支援教育について～この4年の流れを振り返って～」

- ・聴覚障がいのある生徒に向けての授業、試験への配慮が行われる。（合理的配慮）
- ・校内支援教育委員会の時間内会議の充実。支援サポーター配置、専門支援員の指導体制の明確化。
- ・机間にかばんを置かないようにすること、教室の前の黒板、掲示板をシンプルにするという学年統一の指導がなされる。（ユニバーサルデザイン）
- ・教室のかばん置き場の整備のため、1年生全教室の後ろ黒板の片側に棚を設置する。
- ・校内授業研究会について、学習指導委員会を中心に年2回の授業研究会を実施。
- ・授業づくりの3つのポイント。（構造化・視覚化・協働化）
- ・今後の課題として、小中連携のさらなる進展。（個別の指導計画の連続性）
- ・授業の指導観に対する職員の意識の一致に向けての研修の実施。  
（生徒の発達の課題に対する研修と同時並行で行う）

### ○「支援教育研究協力校1年目の取り組みから考える体制づくり授業づくり」

- ・支援学級での取り組みや通常学級との交流、学習における配慮の仕方や校内体制。
- ・隔週でおこなわれる支援委員会（管理職、支援学級担任、各学年より1名の教員専門支援員で構成）について。
- ・支援学級在籍の生徒の情報交流や今後の予定等を話し合い、全教員の共通理解を図る。
- ・生徒会との夏・冬の交流会。

- ・抽出授業における分かりやすい学習方法の模索。
- ・支援教育研究協力校としての取り組み。
- ・支援学級担任だけではなく、通常学級担任も抽出での学習の時間を持つ。
- ・家庭との連携を図り、丁寧に指導を行う→トラブルの迅速な対応につながる。
- ・課題として、教科の特性を活かしながら、ユニバーサルデザイン化の浸透を工夫する。

## 茨木市の特別支援教育の 進んだ取り組み

- 1) 通常の学級及び学校全体での  
「学びのユニバーサルデザイン」を実践が広がってきている→どの学校にも落ち着きが見られる
- 2) 中学校での授業改革の取り組み
  - ・公開授業を通して、支援生徒の共通理解
  - ・一人ひとりの学びに注目した支援の在り方
  - ・学年集団の連携、専門性の強みを生かした連携
- 3) 視覚化・構造化・協働化の多くの具体的実践
- 4) 1時間の教材研究が充実→つまずきがどこで生じるかの検証がある→脳の働きからつまずきを見る
- 5) 人権教育の取り組み→価値観を変える取り組み

## 今後の取り組みに向けて

- ・ひとりひとりの子どもの学びを確実にするために通常の学級での指導の3層構造を充実する
- 1段階・・・効果的で科学的根拠に基づく指導  
(ユニバーサルデザインの授業の工夫)
  - 2段階・・・1段階で十分な伸びがみられない場合の補足的指導や個別の配慮
  - 3段階・・・通常の学級外で個別的な集中的指導  
リソースルーム、分割授業、通級指導教室や支援学級など

 異なる考え方の共有化(学び合い)

## 2 どの子にも確かな学力保障を

### ～支援教育研究協力校2年目の取り組みから～

(柿田 啓行)

#### 1. はじめに

4月から施行される障害者差別解消法ではいわゆる「合理的配慮」と「基礎的環境整備」が地方公共団体の設置する小中学校では義務化される。どの子にも確かな学力を保障するために、これらをどのように進めていけばいいのか。2年目となった支援教育研究協力校としての取り組みと共に、様々なバックアップについて報告する。

#### 2. 本校の概要

600名ほどの在籍数のうち、90名が個別の指導計画を作成し、対人・学習での支援を必要としている。

#### 3. 支援教育研究協力校2年目の取り組み

研究授業1回、講話2回、巡回相談1回を行い、特別支援教育アドバイザーの米田先生に教えていただいた。

#### 4. 確かな学力保障のための取り組み…合理的配慮のPDCAサイクル

(1) 家庭訪問や個人懇談等で「個別の指導計画」の作成。合理的配慮の明記。…P

(2) 合理的配慮の提供 …D

①「個別の指導計画」を作成している児童について、算数の教科中心に教室に入り込み、学習支援を行う。

②学習室での集中的な支援

ア 集中して学習に臨めない

イ 長期欠席児童のフォロー

ウ 学習の困難さが著しい児童

エ 問題文が読みづらい児童の個別対応

③登校支援

8時30分より靴箱の確認をし、必要に応じて電話連絡か家庭訪問を行う。

(3) 4名（+管理職）での密な連絡会。…C

(4) 家庭訪問や個人懇談等で「個別の指導計画」の見直し。…A

(5)「個別の指導計画」その他の資料を児童ごとにファイリングし、閲覧可能な鍵付きロッカーに保管。

#### 5. まとめ

障害者差別解消法には合理的配慮は「意思の有無」ではなく「十分な教育を受けられるかどうかの視点から判断していくこと」が重要とある。全ての子ども「できた」「わかった」の為に、児童の様子を観察し、教職員全体で対応に当たって生きたい。教育は「今日行く」「協育」の意識を全体で共有していきたい。



# 3 ユニバーサルデザインの授業づくり

(井上 直哉)

## 1. はじめに

昨年度は、UDの考え方を教師間で共通理解することからスタートした。

「視覚化」「構造化」「協働化」という観点から環境整備や授業のアイデアなどをお互いに検討し研究を進めることができた。

今年度は、実際に授業を進めていく上での留意点やアイデアを検証し、どの教科においても、楽しく参加できる授業はどうあるべきかを考えていくことにした。

## 2. 研究テーマ

「楽しく進んで参加する授業づくり」

一どの子にも分かりやすい授業（ユニバーサルデザイン）をめざした研究を進める—

## 3. 研究を進めるにあたって

(1) 授業の基本的な形態としてUDの考え方を取り入れていく。

- ① どの教科においても目に見える形での配慮を考えていく。
- ② 教材の工夫（内容の精選。具体的なアイデアや工夫）・発問の焦点化
- ③ 学び合い

(2) 授業以前の取り組みとしてUDの基礎的環境を整える。

・掲示物(児童目線) ・教室の整理 ・児童の持ち物等

(3) 授業のアイデアの交流。

(4) 昨年は国語科の授業を中心に研究をすすめたので今年度は他の教科も取り上げる。

## 4. 研究授業と校内研修会

(1) 社会科の授業で

5年生「社会」「わたしたちの食生活と食料生産 ～米はどこから～」

(2) 校内研修会（8月）で

各学年のUDの取り組みと課題や疑問についてまとめた。

講師先生より助言を頂き、共通理解を深めることができた。

(3) 国語科の授業で

4年生「国語」「ごんぎつね」

(4) 体育科の授業で

2年生「体育」「宝運びゲーム」

研究授業後の反省会では、観点を決めてグループ討議を行った。

(5) 校内研修会（1月）で

一年間の取り組みの成果とまとめ

## 5. 2年間の研究を振り返って

- ・当たり前になってきたこと。 ⇒さらなる気付きが必要なこと。
- ・今後もUDの考え方をベースにして一人ひとりを大切にしていけること。
- ・授業づくりのためには、まず学級集団作りが大切であること。
- ・来年度はUDを踏まえた「体育」授業の研究をすすめていくこと。
- ・安心と自信を持って学習できる学校をめざしていくこと。

## 4 支援教育について～この4年の流れを振り返って～

(磯崎 謙三)

### 1. はじめに

特別支援教育が正式に実施されてから8年。職員の中にも「支援教育」が位置付いてきたと感じられる部分と新たな課題を感じる部分がある。先進的な取り組みから見ればまだまだ不十分な点が多いが、C 中学校における「支援教育」の取り組みの流れを振り返り、「前進面」と「課題」を改めて確認したい。

### 2. 「支援教育」について～この4年の流れを振り返って～

#### (1) 2012 年度

- ・「聴覚障がい」のある生徒に向けての授業、試験（英語リスニングテスト）への配慮が行われる。 →合理的配慮
- ・「発達障がい」のある生徒の保護者との連携→「個別の指導計画」作成。
- ・「発達障がい」のある生徒の私立高校受験にあたっての事前の情報交流。
- ・「発達障がい」のある生徒について進学先との情報交流。
- ・小学校との複数回の通常学級に在籍の「発達障がい」のある生徒の情報交流。
- ・教育センター巡回相談の活用。

#### (2) 2013 年度

- ・「視覚障がい」のある生徒に向けての授業（拡大教科書、教材の拡大コピー、座席配置他）、試験（国語時間延長）への配慮が行われる。 →合理的配慮
- ・41 期生入学にあたり、机間にカバンを置かないようにするという学年統一の指導がなされる。 →ユニバーサルデザイン
- ・「視覚障がい」の理解に向けた校内研修。（大阪市立視覚特別支援学校との連携）
- ・通常学級在籍生徒で「個別の指導計画」のある生徒の保護者との懇談を持つことが3 学年統一で確認される。
- ・教育センター巡回相談の活用。
- ・校内支援教育委員会の時間内会議の充実。
- ・支援教育サポーター配置、専門支援員の指導体制の明確化。

#### (3) 2014 年度

- ・42 期生入学にあたり、机間にカバンを置かないようにするという学年統一の指導がなされる。 →ユニバーサルデザイン
- ・「聴覚障がい」の理解に向けた校内研修。
- ・教育センター巡回相談の活用。
- ・支援教育サポーター、専門支援員の指導体制の定着。
- ・教室のカバン置き場の整備のための試行として、2 年生教室1 クラスの後ろ黒板の両側に棚を設置する。 →UDに向けた環境整備

(4) 2015 年度 (支援教育研究協力校指定 1 年目)

- ・43 期生入学にあたり、机間にカバンを置かないようにすること、教室の前の黒板、掲示板をシンプルにするという学年統一の指導がなされる。  
→ユニバーサルデザイン
- ・「聴覚障がい」のある生徒に向けての授業、試験（英語リスニングテスト）への配慮が行われる。  
→合理的配慮
- ・「聴覚障がい」のある生徒に向けての全校行事での可能な限り手話通訳者の派遣要請。  
→合理的配慮
- ・1 学年で学年コーディネーター主体の「個別の指導計画」作成。
- ・米田先生を講師にむかえ「ユニバーサルデザイン」をテーマにした校内研修を実施。
- ・教育センター巡回相談の活用＋米田先生の巡回相談の活用。
- ・支援教育サポーター、専門支援員の活用。
- ・学習指導委員会より、黒板に貼る「本時の目標」のプレート全教室に配布。  
→ユニバーサルデザイン
- ・後期生徒会役員で、北棟階段の各階に教室指示の掲示がされる。  
→ユニバーサルデザイン
- ・「視覚障がい」のある生徒の進路指導への配慮。
- ・教室のカバン置き場の整備のため 1 年生全教室の後ろ黒板の片側に棚を設置する。  
→UD に向けた環境整備

### 3. 校内授業研修会

- (1) 本校では初任者研究授業、教科部会の授業研究会をのぞき学習指導委員会を中心に年 2 回の授業研究会を行っている。(今年のうち 1 回は小学校 2 校も含めた合同授業研究会。)
- (2) 授業づくりの 3 ポイント
  - ①構造化 生徒が安心し、自立して行動できるように、環境をわかりやすく整理、再構成し、明確化することについては意識が高まってきている。
  - ②視覚化 本校は 2009 年度文部科学省の「電子黒板等を活用した教育に関する調査研究」の研究指定を受けた。全教室に電子黒板があるという恵まれた条件の下、電子黒板を使った授業は日常的に行われている。
  - ③協働化 班活動、グループワーク、ペアワークは特に英語科では日常的に行われているが、各教科の特性もあり、今後の課題である。

### 4. 課題

- (1) 物理的な条件 (40 人超の学級の存在)
- (2) 職員の多忙化 (生徒指導、クラブ指導、進路をめぐる問題が、個別指導の必要な生徒に対する指導を困難にしている現状)
- (3) 小中連携のさらなる進展 (「個別の指導計画」の連続性)
- (4) 授業の指導観に対する職員の意識の一致にむけての研修 (生徒の発達の課題に対する研修と同時並行で)

# 5 支援教育研究協力校1年目の取り組みから考える 体制づくり授業づくり

(児玉 直樹)

## 1. はじめに

支援学級での取り組みや通常学級との交流、学習における配慮の仕方や校内体制などを紹介する。

## 2. 校内での連携や取り組み

支援学級に在籍する生徒が安心して学校生活を送ることができるように教員が取り組んでいる事を紹介する。

### (1) 隔週でおこなわれる支援委員会

管理職・支援学級担任・各学年より1名の教員・専門支援員で構成される支援委員会を隔週でおこない、支援学級籍の生徒の情報交流や今後の予定等を話し合い、各学年会で全教員の共通理解を図る。

### (2) 生徒会との夏・冬の交流会

毎年おこなわれている交流会で、夏には七夕の笹の飾り付け、冬にはクリスマスツリーの飾り付けや中庭のイルミネーションをしている。

年々支援学級在籍の生徒は増加傾向にあり、今後益々大きな交流行事になる。

### (3) 抽出授業におけるわかりやすい学習方法の模索

入り込みでの支援が多く、一部でおこなっている抽出授業での学習の中で対象生徒がわかりやすく、楽しく学習に取り組んでいる様子を報告する。

## 3. 支援教育研究協力校1年目の取り組み

支援教育研究協力校として年度内に特別支援教育アドバイザーの米田和子先生による巡回相談や講話、研究授業の様子他に日頃から北陵中学校が取り組んでいる支援教育について報告する。

## 4. 成果と課題

支援学級在籍の生徒が増加している一方で、今年度の抽出での学習は、教員と1対1で学習する機会を多く設定することができた。支援学級担任だけではなく、授業時数にゆとりのある通常学級の教員にも抽出での学習の時間を作ってもらい、複数の教員と学習することができた。また、家庭との連携も丁寧におこなうことができ、大きなトラブルに巻き込まれても迅速に保護者を交えて対応することができた。

課題は、通常学級での各教科の特性を活かしながら、ユニバーサルデザイン化を浸透させ工夫していくことだと考える。生徒数が少ないクラスの中で、自分の学びや友達と関わることの楽しさが支えになっているということに気づかせて、自信と意欲につながるような授業を展開する必要がある。